

シャンデリアきらめく王宮の大広間、舞踏会に訪れた人々はみな動きをとめて、中央での騒ぎに視線を注ぐ。張り詰めた空気がいたたまれないが、ここで引き下がるわけにはいかないと、わたしはきゅつと拳を握って顔を上げる。

異様な雰囲気の中、楽団の奏でるワルツはまったく乱れることなく優雅な旋律を奏でている。わたしは動揺を抑えながら、先ほどまで婚約者だった男の言葉を問い返した。

「殿下、先ほどはなんとおっしゃったのですか？婚約は破棄したってどういうことですか」

「何度聞かれても答えは変わらないぞ？お前とはすでに婚約を破棄したといったのだ」

贅を尽くした衣装に身を包んだ男は、尊大な物言いを崩さず一切悪びれる様子もない。

彼の腕に絡みついている女は一見清楚でたおやかだが、わずかに口の端が歪んでいる。

令嬢はパートナーを伴って舞踏会に訪れるのが常識だ。よって今回も、婚約者であるエドワードがエスコートしてくれるものだと思ひなかつた。しかしいつまで待っても屋敷に迎えが来ない。欠席するわけにもいかず、仕方なく侍女を伴って王宮に訪れたのだ。周りの好奇の視線に耐えながらエドワードを見つけ、静かに問い詰めたところに返ってきたのはすげない返事だつた。

——貴様との婚約は破棄したから、下がれ。

たつた一言でいままでの関係を清算しようとする男に、はいそうですかと引き下がるわけにはいかなかつた。

「つ、それは陛下もご存じなんですか？わたしの家はなんの報せも受けてはおりません」

「父上はご存じないが、きっと同じ意見だろうさ」

感情をあらわにするのは下品なことだと、幼いころから言い聞かされて育てられてきた。けれども、目頭が熱くなつていくのを止められない。王子の婚約者としての教育は厳しいもので、日々そつなくこなすだけでも大変だった。それでも国、ひいては国民を共に背負うのだと考えて、必死に努力してきた。それにも関わらず積み重ねてきた研鑽が、目の前の男の気まぐれで一瞬で無駄になったことがやりきれない。ひそかに拳を握りしめる。

「このアンジェリカは私が支援している画家の弟子なのだ。貴様と違って新しい芸術を理解する女でな。カビの生えた考えに毒された貴様よりもよほど私にふさわしい」

聞くに堪えない罵詈雑言に、鉄の玉を無理やり込み込まれたように胸が重くなる。ふん、と嘲笑うように笑う王子に、何を言ってもきつと無駄だ。

胸に渦巻く感情を必死に抑え込んでいると、シャンパングラスを並べたトレイを持った使用人が側を通っていく。わたしはほとんど反射的に、そのグラスを取った。散々こちらを侮辱したにも関わらず澄ました顔をした二人に中身をぶちまけてやりたい。

——落착け、わたし。腹が立つけどここで酒をぶちまければ大変なことになる。わたしだけならまだしも、親戚縁者まで無事ではいられない。

必死に言い聞かせてなんとか馬鹿な衝動を耐える。一瞬身構えた王子がバカにしたようにはっと笑った。情けなさや怒りに耐えかねてグラスの中身を一気に飲み干す。かつと喉が焼けるように熱くなったが、かえって頭がさえた。

「ふっ、いままでお世話になりました殿下……。そちらの方とどのように国を治めるのか楽しみにしておりますわ」

必死に感情を抑えつけて嫌味を吐き捨てる。王子は嘆息し、もう話は終わったとでもいわんばかりに、家同士の決めた婚約を破棄してまで夢中になった女の手を取り、軽やかにステップを踏み始めた。招待された貴族たちも、一瞬の逡巡を見せながら王子に従うようにダンスを始めた。もちろん、わたしに声をかけてくる人などなにもいない。幼いころから付き従ってくれていた侍女だけが、心配そうにわたしを見つめている。

あまりにもみじめで踵を返そうとしたそのとき、低く落ち着いた穏やかな声が聞こえた。

「お嬢さん、オレと踊っていただけませんか」

「……え？」

わたしは困惑しながら男の顔を見る。見るに見かねた知り合いかと思ったが、顔に見覚えはない。

切れ長の瞳にすっとした鼻立ち。癖がなく艶がある、深い夜の色をした背中のかほどみである長い髪を、後ろで一つにまとめている。こんな美丈夫、一度見れば忘れるわけがない。黒曜石のような瞳でじっと見つめられたものだから、思わずぼうつとしてしまった。袖口には繊細なレースが施されていて、一流の職人が編んだものだとわかる。見慣れない意匠だったから別の国からの招待客かもしれない。

「い、や、あなたにご迷惑ですから、わたしにはかまわず」

ここでわたしにいい顔をすれば、王子の不興を買うかもしれない。彼がどんな立場かはわからないが、王族に目を付けられていいことはないだろう。

けれども彼は強引にわたしの手を取った。優男風なのに、白い手袋の下で感触は、ゴツゴツとしていた。何度も身体に覚え込ませたステップをしぶしぶと踏めば、ふわりとやさしく微笑まれた。

「殿下は見る目がないな。こんなに美しい人なのに」

かあつと頬に熱くなる感覚がして、めまいがする。貴公子の足を踏みそうになるが、上手に避けてくれて事なきを得る。

「……先ほどの騒ぎ、みていましたよ。本当にひどい王子様だ」

声を潜めて囁かれた言葉に、わたしは目を見張る。

「あなたはオレのことをご存じないかもしれませんが、オレはあなたを知っているんですよ。スペトリーノ先生に歴史の教えを乞うていたんです。あの気難しい先生が、あなたのことを熱心な生徒だと褒めていたので気になっていて」

「スペトリーノ先生に？」

わたしの脳裏にとある老人の顔が浮かぶ。高名な学者である先生は同時に、王侯貴族に頼み込まれて家庭教師もしている。父が先生の説得に成功したおかげで、一時期うちの屋敷によく出入りしていたのだ。神経質で顔に深く刻まれた皺が印象的で、ひねくれていた人だったが、世辞をいわない人だったのでわたしは彼のことが

嫌いではなかった。

「ええ、そうです。あの気難しい頑固な先生が、ですよ。ですからきっとあなたは
この国の王妃になるにふさわしい方です。しかし殿下にはそれを見抜くだけの力
がないようだ。どうです？オレの奥方になっていただけませんか？」

清々しいほどに元婚約者をコケにする男に、わたしは思わず吹き出してしまふ。
「ふふ、ありがとうございます。そういつていただけると、うれしいですわ。きつ
とあなたなら引く手数多でしょうに。誰にでもそうやってやさしくてあまい言葉を
囁いて、令嬢たちをのぼせ上らせているんでしょうね」

冗談でも求婚してくれるのがうれしくて、もやもやとした気持ち晴れていく。
笑って気が抜けたのだろう。もう少しでワルツの曲が終わるといふ瞬間にぐにやり
と世界が歪んでいく。

「……あら？」

気持ちが落ちて着いたからか、本格的にお酒が回ってきたのかもしれない。よろめくわたしを、男が支えた。見た目よりはるかにがっしりとした腕に、胸の奥がとくと高鳴る。

「あ、ありがとうございます」

腰に手を回され引き寄せられる。長い前髪が頬にかかるほどに近づかれて顔を覗かれて、思わず視線を逸らしてしまった。

「あ、あの近いのですが」

「おや、これは失礼しました」

男はおもむろに距離を取るが、わたしの心臓は早鐘を打っている。将来の王妃になるためにずっと勉強に励んでいたわたしにとって、同年代の男性に淡い思いを抱く暇などなかった。はじめての感覚にどうすればよいかわからない。紳士的な感情で助けてくれただけの相手に夢中になるなんて、あつてはならないと心の内で唱え

てひそかに深呼吸する。

「ご気分がすぐれないようだ。迎えを呼びましょう」

男は側に控えていた使用人と思しき男を呼びつけて、馬車の用意をしてくれる。豪華な馬車に掲げられた紋章に、見覚えがある気がするが酒で酩酊した頭ではよくわからない。ただ侍女のキャサリンがひどく慌てているのはわかった。後日しっかりと礼をするためにも名前を聞いておかなければ。身分が高い人間は、名前を聞かれると不機嫌になることがある。彼らは自分の顔や服装を一目見ただけでその素性を察せられないと相手を、もの知らずだと怒るのだ。しかし彼ならば憤慨して態度を急変させるようなことはしないだろう。出会ったばかりの相手に信頼を寄せている自分に苦笑しながら口を開いた。

「……あの失礼ですが、お名前をお伺いしても？」

そう尋ねると、おもむろに整った顔が近づいてきて、頬に柔らかいものが触れる。

「これは失敬、ルキウスと申します。ルキウス・デクルー。あなたを妻に迎える男の名だ。覚えておいてほしいな」

微笑んで手を振る彼をぼんやりと見つめた。馬車に揺られながら、頬にキスされたのだと気づいたときには、もう王宮は遠くなっていた。

翌朝、ズキズキと痛む頭を抱えながらわたしは自分が酒に弱かったのを思い出していた。騒がしい足音が徐々に自室へと近づいてくる。乳母のただならぬ様子に返事をする、勢いよく扉が開け放たれた。

「お、お嬢様、もうお着換えはすんでいますか？」

「もう少しで終わるところだけれども、どうしたの？」

いつも朗らかな表情を崩さない乳母が、慌てふためいているのは珍しい。

「そ、それがお嬢様にお客様がみえてまして、とにかく急いで応接室に来るようにと旦那様が仰せです」

首をかしげながらも急いで髪を整えてもらい呼び出された部屋へ向かうと、そこにいたのは頭を抱えた父と、昨夜一緒に踊った貴公子だった。

「アリア嬢、こんにちは。さっそく約束を果たしに来ましたよ」

にっこりと微笑んだ彼に、わたしは昨夜のプロポーズが冗談ではなかったのだと

目を見張った。優雅な物腰でわたしの手を取り口づける彼は、美しいだけではなく気品がある。困惑するわたしと穏やかにほほ笑む青年の間に、父が割って入る。

「私はお前をこの国の王妃になるべくふさわしく教育してきたつもりだ。そしてお前は期待通りの令嬢に育ってくれた。お前ならば、別の国の王妃になっても立派に勤めを果たしてくれるであろう。この方に嫁いでくれるな」

「……別の国の妃？」

頭に浮かぶのは、馬車に掲げられていた紋章。描かれていた月桂樹と大鷲。特徴のある意匠にはっとする。酔っていたとしてもなぜ気が付かなかったのだろう。月桂樹と大鷲が、世界に名が轟く王国の象徴だと子供でも知っている話だ。ここ、リブラン王国よりも南に位置し、強大な海軍を有する大国だ。

「……ロマナ王国の主はまだお若い方だと噂には聞いておりましたが、先日は失礼しました」

慌てて淑女の礼を取れば、彼は穏やかにほほ笑んだ。

「あなたのような聡明な女性にこそ、一緒に国を治めてほしい。オレの王妃様になっただけかな。オレの妻になる方は、あなたをおいて他にいない」

白い頬をうつすらと染めたルキウスの顔に見とれてしまう。情熱的に求婚してくれる帝王に、わたしは頷く。恋に落ちて結婚するなんて、自分には許されないと思っていたのに。考えもしなかった幸運を少し恐ろしく感じながら、今度は自分から彼の頬にキスを落とした。

ロマナ王国への輿入れは盛大に行われた。金銀の装飾を施した馬車で都に入り、王宮に輿入れするまでパレードして国民にお披露目する。大聖堂で行われた結婚式は国中の名だたる貴族を招待し盛大に執り行われた。様々な儀礼を一日がかりでこなし、やっと二人きりになる。天蓋付きのベッドがある広い部屋は、蠟燭のあたたかな光に照らされている。そこに湯浴みを済ませた若い男女が二人きり。これでドキドキしない方がおかしい。

「緊張しているのかい、アリア嬢？」

「どうかアリアと及びください、陛下」

厳かに行われた結婚式での威厳ある姿もカッコよかったけれど、寝間着姿はさらに目の毒だ。薄い布越しに、鍛え上げられた筋肉の陰影が見て取れて、かっとなりが赤くなってしまう。

「陛下は着やせするタイプなのです……」

そう漏らしてから後悔してしまう。これから抱かれるのを意識してしまっているのを白状しているみたいじゃないか。

「陛下だなんて、公務でもないのにそんなよそよそしい呼び方はよしてくれ。ルキウスと呼んでほしいな。オレたちはこれから共に歩んでいくのだから」
やさしく腰を撫でられて、ビクリと身体が震える。

「そう硬くなるな。オレの目を見て。お前にひどいことをしそうな男の顔に見えるか？」。

「ん、ルキウス……」

ちらりと視線を上になげれば、うつとりと目を細めたルキウスがいた。穏やかな笑みを口元にたたえながら、すっぱりとわたしを腕の中におさめてしまう。じんわりと男の熱が広がっていった、強張っていた身体がほぐれていく。

おそろおそろ広い背中に腕を回せば、ポンポンと背中を叩かれた。

「安心したか？アリアの気が乗らないなら別に今夜じゃなくてもいい。ゆっくり本当の夫婦になっていけばいいのだから」

わたしを気づかいながら、やさしい声色で語り掛けてくれる。あの人は、一度たりともこんなことしてくれなかった。こちらの気持ちを慮るそぶりすら見せず、わたしがいろいろな気を回してもそれを当然の顔をして受け止めていた。

ルキウスはにつこりと微笑んだまま、背中を向けて布団をめくる。きつとわたしが怖気づいているのを見て、気をつかつてくれたのだろう。そんな彼の寝巻の裾をつかむ。

「あ、あの、陛下……、じゃなかった、ル、ルキウス」

市井の恋人たちのように呼びかければ、ルキウスがゆっくりと振り返って視線を合わせてくれる

「どうした？」

頬をくすぐる指先さえやさしくてぎゅうつと胸が締め付けれる。

「おねがいします、抱いて下さい」

「いいのか？今日は疲れただろう、また日を改めて」

わたしのことを想って身を引いてくれようとするのがうれしいのに、焦れたい。こんなに大切にしてくれる彼の気持ちに報いたい。義務感じゃない、心の奥底から湧きおこる衝動だった。

「すぐにあなたのものにして欲らくてはいや……！」

「ふ、かわいい妻にそこまでねだられて、応えぬわけにはいかないな」

蠟燭のおぼろげな光に照らされたルキウスが、自身の寝巻をはだけさせる。色っぽい仕草に、ドキドキと見とれていると、ローブの帯があつという間にほどかれてしまう。こぼれた乳房を揉まれて、声が出てしまった。

「あっ！」

「はは、やわらかくてあたたかいな、想像通りだ。傷つけてしまわないか心配になるな」

やわやわと乳房を揉まれて、骨ばった指で形を変えられていく。たったそれだけなのに、妙に肌が汗ばんでしまっただけはさかしい。さざ波のようなこそばゆさに、思わず唇をかみしめる。

「こら、ダメだぞ。傷になってしまう。噛むのならばオレの指を噛め」

「そ、そんな、できません」

「じゃあそのかわいい声を聞かせてくれ」

「か、かわいいって……、そんな、ふっ、んんっ♡」

乳房と乳輪の境目をくるくるとくすぐられて身をよじる。頭を左右に揺さぶって、見悶えれば、ルキウスがふうっと熱っぽい吐息を吐いた。

「ああ、いとおしいなあ。顔を赤くして、うつすらと涙ぐんで、戸惑いながらもオレに身を任せて。いとおしくてたまらない」

汗ばんだ太ももをなぞりながら、うつすらと生えた茂みを撫でられる。ショーツのクロッチ部分をすりすり指の腹で擦られて、ぞくぞくと身体が震える。

教育係からは、痛いとしても顔に出さずに微笑んでいろときつく言い聞かされた。女性が快感を得るのははしたないことだから、何をされても黙って耐えなさいと。自分でも辛抱強いほうだと自覚はあったから、多少の痛みであれば耐えられると決意していたのに。でもルキウスからもたらされる、このむずがゆい感覚は知らない。

「や、やん、そ、そんなんっ」

「ここがすきなのか？ 敏感でかわいいな♡ほら、もっと力を抜いてオレに身をゆだねて♡」

クリトリスをすべすべの布越しにスリスリ♡と触られただけで、ビリビリとした

甘い痺れが身体を駆け巡っていく。指が滑る感覚がだんだんはつきりと伝わってきておろおろしながら触られている場所を見ると、触られていた部分がじつとりと湿っていた。

「いやらしいな、アリアの粘っこい汁がオレの指に絡んでくる」

「ち、ちが、わたしはそんなにふしだらじゃ……」

「王太子妃の教育では貞淑であるように教えられたのか？でもオレの前では我慢しなくていいんだ」

ショーツの隙間から指が潜り込む。とろとろとあふれる粘液を指に絡めさせ、くちゆくちゆと音を立てられ顔が熱くなった。

「や、やだ、あ、あまりさわらないで……」

やることなすこと否定されていた後遺症だろうか。ルキウスはやさしい人だとわかっていてのに不安になる。やっぱりと思い直して唇を引き結んだところで、

きゅっ♡と敏感な突起をやさしく摘ままれた。

「~~~~っ♡♡」

「また声を出すまいとしたな？まったく強情な妻だ」

クリトリスの裏筋をつうっ♡となぞらながら、先端を軽く左右に弾かれる。ルキウスは、この敏感な突起全部かわいがるつもりなのだ。

ぬちゅっ♡すりすり♡くりくりゅっ♡

擦られたりしごかれたりつぶされたり。いろんな刺激でクリを追い詰められて、クリが大きくなっていく。体中が熱を持っているけど、クリトリスはさらにジンジンと疼くように熱い♡

「や、それ、やらっ♡ゆるしてください♡ゆるして♡へ、陛下より先にイクなんて、だめえ♡」

太ももがびくっ♡びくっ♡と勝手に震える。ぎゅっ♡とお腹に力を込めて、目を

つぶる。イっちゃダメ♡イっちゃだめ♡心のナカで何度も唱える。

「ふっ♡ふーっ♡ふーっ♡ん♡ん♡ん♡」

「顔真っ赤にして耐えているアリア、いやらしいな。イキそうな顔もいいが、イキ顔もみたいな♡オレを愉しませるのがアリアの役目だというなら、かわいい顔も晒してくれるんだろう？」

クリを弄る手つきが乱暴になる。ガチガチの突起を押しつぶしながら左右に激しく揺さぶられる。クリがおかしいくらいに熱くなって、切なさがつる♡早く解放したくてたまらない♡

「あ♡や♡やあ♡きゅんきゅんするの♡なにこれしらにゃい♡や、やらやらあ♡」
否定の言葉さえ甘ったるくて、自分がいやらしいと自覚してしまう♡イキたい♡イキたい♡勝手に腰が突き出た瞬間、真っ赤に腫れあがった突起の皮がずり下げられた。

守るものがなくなった剥き出しのクリの先端を大きな手のひらですっぱり覆われてから、円を描くようにかわいがられる♡

「ばっ♡あぁ♡ビリビリしゅるっ♡やぁ♡」

「オレを悦ばすことがアリアの役目だというなら命令してあげよう。——イけ、アリア」

ぐちゅぐちゅぐちゅ！♡♡グリッ♡♡♡グリッ！！♡♡♡

ひとときわ強く押しつぶされた瞬間、全身に電流が走ったかのように身体がビクビクと痙攣する。腰を突き出してガクガク震えてから身体が跳ねて、そこからゆっくりと弛緩した身体がベッドに沈みこむ。

「——っ♡??えぁ??」

「はは上手にイケたな♡」

愛液まみれの指を見せつけるように舐められて、かあっ♡と顔が赤くなる。足に

ひっかけてたままだったショーツを脱がされて、太ももをおおきく開かされた♡

「あ♡」

「すっかりトロトロだ」

まるで検分するかのようにまじまじと秘裂をひろげられて、視線で嬲られる。ヒクヒクとうごめく肉襞の動きさえ見逃さないように凝視されて、とろりと愛液がにじんでしまう♡

「だが、オレのを啜えこむにはまだ足りん。アリアに苦痛を与えるのはオレも本意ではないからな」

ベッドサイドに置かれたハチミツ色の液体が入った瓶の蓋を開ける。ルキウスはそれを少量とって手のひらで練る。糸を引いたネバネバの液体がまとわりついた指がおマンコに触れた。

「んひっ♡な、なにっ？♡ルキウスっ♡」

「深く氣にすることはない。軽い媚薬のようなものだ。まあ媚薬といっても、身体の緊張をほぐす程度の軽いものだが。だが、こうやって塗られると気持ちいだろう？」

いったばかりでまだブルブルと震えているクリトリスが、あたたかい粘液に包まれる。触れた部分がじんわりとあたたかくて、その刺激でまたむくっ♡むくっ♡と勃起してしまう。どろりと媚薬ではない粘液がおマンコから垂れてきてしまう♡

「や♡ああ♡そんな、ル、ルキウス、わたしのことはいいから、は、はやくルキウスのをわたしの肉輪に納めてください♡♡」

ルキウスの氣遣いはうれしいけれど、このままでは務めを果たす前に気持ちよすぎて氣絶してしまいそうだ。跡継ぎを産むのは重要な王妃の役目。初夜で子種をもたえずに失敗するなんて、そんなこと許されない。

「まったく、アリアはマジメだな。そんなに役目を果たしたいなら自分でおマンコ

広げてオレの子種をねだってみろ」

「おっ、おマンコって……」

卑猥な言葉に顔を上げてルキウスの顔を見ると、目尻の端が緩んでいた。本気で言っているわけじゃなくて、わたしをからかって遊んでいるのだろう。どうせできるわけがないとでも言いたげなルキウスの表情に、負けん気がわく。

「わ、かりました。お、おマンコ広げて、陛下、いえ、ルキウスの子種をおねだりすればいいんですね……」

恥ずかしさを抑え込んで、気持ちよさに膨らんだマン肉を指をひっかけてくぱっ♡と左右に開く。小陰唇から放たれるむわっ♡とした甘酸っぱい匂いが鼻孔をくすぐる。こんな卑猥な香りが自分から発せられているのだと思うと頭がくらくらするけれど、腰をくねくねと振って媚びて、上目遣いでおねだりした。

「お、お願いします。る、ルキウスのザーメン、わ、わたしのおマンコに注ぎ込んでください……っ♡」

ぐくりっ♡とルキウスの喉になる。わたしに欲情してくれているのだ。とろりと愛液が垂れていく。

「ああ、上手なおねだりだ。よくできたな」

バスローブを押し上げている凶悪なものを想像して身構える。パンパンに腫れあがってテント張っているそれにわたしのナカを抉られる想像をして、勝手におマンコがぬかるんでいく。ルキウスの骨ばった指が小陰唇に触れてから、にゆるんっ♡と秘裂に侵入してきた。

「あ♡にゃ、んで♡」

「いきなり挿入するなんて不躰なこと、オレはしない。たくさんグズグズにしてからご褒美をやろう♡」

指の腹に、ちょうどクリトリスの裏側のざらざらした部分を掠められれば、びくっ♡と勝手に身体が震える。突起をかわいがられるのとは違った、身体の奥底から湧き上がってくるような甘い痺れ。困惑してルキウスを見つめれば、空いた手でよしよしと頭を撫でられた。

「はは、本当に初めてなんだなあ♡あの王子が見る目がなくてよかった。オレ好みの淫乱王妃に仕込んでやろう♡」

媚薬の小瓶を取り出され、直接おマンコに液体を掛けられる。じんわりとあたたかい液体がクリを滑る感触に、ぶるっ♡と身体が震えた。ルキウスは身体の緊張をほぐす程度のものだといったが、本当だろうか。塗られた場所がジンジンと疼いて、触ってほしくてたまらなくなる♡ただでさえ期待してる淫穴がぐぽっ♡と広がって、ブルブルと震え出す。本当は男がほしくてたまらなくなる成分とかが入っているんじゃないだろうか。

「や、いやあ、淫乱だなんて……」

「別に恥ずかしがることではないだろう？ オレの手でもっと淫らになってくれ♡ 昼は貞淑で聡明で、少し気の強いアリアが、夜は淫乱になってオレを求める。はは、たまらないな」

このまま本当に淫乱になってしまったらどうしようという不安と、早く愛してほしいという期待がないまぜになる。じわじわナカにしみ込んでいく媚薬に、ぶるっ♡と背中が震えた。くりゅんっ♡とおマンコの浅い場所で指を曲げられて。敏感な粘膜が押しつぶされる。

「んひっ♡」

「ぐちょぐちょだな♡この様子では必要ないかもしれないが、ナカにも塗ってやろう♡」

ちゅぽんっ♡と蜜穴から指を抜いて、恥丘をベタベタと濡らしていたはちみつ色

の液体を指にたっぷり絡めてからまた指が挿入されていく。じんわりと媚薬が染み
た部分が熱くなるのは、ルキウスの指の腹に撫でられているからだろうか。嬉しそ
うにうごめく肉壁に羞恥しながらも、指を締め付けずにはいられない。くちゅく
ちゅとかき混ぜられて、敏感な粘膜が媚薬を吸収していく♡蜜壺が勝手にうねうね
♡とうごめいてルキウスの指にますますしゃぶりつく。

「おや、アリアは葉の類が効きやすいのか？媚薬を塗った場所のおマンコの肉壁が
吸い付いて凸凹わかってしまうな♡ここにオレのモノを挿れたらアリアのマンコ
でチンポしごかれてすぐに濃いのが出てしまいそうだ♡だが、まだお預けだ♡一度
指でおマンコかわいがって、感じさせて子宮下ろしてやるからな♡」

ルキウスの指がぐりゅんっ♡とザラついた天井を抉る。はじめてだけれど、そこ
が自分の弱点なのだと自覚してしまうくらいには面白く腰が跳ねた。

「んおっ♡」

ケダモノのような濁った喘ぎ声にはっとして口元を覆い隠す。

「声を抑えるな。命令だぞ」

「そんなことに、王命をつかわないでくださいっ……!!」

思わず上目遣いで睨みつけると、ルキウスは心底楽しそうに笑う。大口を開けて笑うその顔が無邪気で、わたしはゆっくりと手をベッドに降ろした。

「そうだ、せっかくなわいららしい声なんだから聞かせてくれ♡アリアはここが気に入ったんだ♡たくさんここを弄ってやろう♡」

人差し指を咥えこまされたまま、また一本、もう一本と指をさらに差し入れられると、カンタンにおマンコへと入り込んでいく♡あつという間に三本に増やされた質量が敏感な粘液をかき混ぜ、ぐりぐりぐりと何度も弱いところを擦る。勝手に身体が跳ねて、おマンコがきゅんきゅんうねる♡気持ちよさすぎて、頭も惚けて、またイってしまいそう♡

「お♡やあ、わたしばかり、愉しんでる、だめなのにつ♡」

「まだ氣にしているのか？アリアのいやらしい顔、そそるぞ♡ほら、もっと素直に氣持ちよくなれ」

卑猥な水音を響かせながら、おマンコをかき混ぜられる♡皮から顔を出したクリトリスがまた赤く腫れあがっていく。クリは触れられてないのに、ダラダラ先走り垂らしながら、物欲しそうに震えている。ナカほじくられるだけでも切ないのに、もっと氣持ちよくなりたいと不満を訴えてるみたいな真っ赤な勃起クリトリス♡これがルキウスにバレたら、大変なことになっちゃう♡

氣づかれたらまずいとわかってるのに、わたしは思わず腰をカクカク♡と震えて突き出した。

「またクリトリス勃起してるじゃないか♡すまない、オレとしたことが放っておいてしまって、こちらも切なかっただろう♡」

「んひっ♡や、やあ、いま触られたらあ♡あああっ♡」

ヌルついた指先がツンと勃起したクリトリスを根本から先端に向かってしこしこ♡としごかれる♡ナカとソトを同時にかわいがられて、足がピンっ♡と突っ張っていく。

くちゅ♡ぐりゅんっ♡しこしこっ♡にゆるっ♡くちゅくちゅ♡くちゅ♡

「あ♡やあ♡また、果ててしま、果ててしまいますっ♡」

「はは、お上品な言い方をするんだなアリアは。ほら、イっちゃうって言うてみろ♡オレにおマンコほじほじされながら、クリトリスシコシコされてイっちゃいますっ♡」

「お、おマンコほじほじされながら、クリトリス、シコシコってされてイっちゃいま、ああっ♡♡」

おなかの奥で膨れあがる快感と同時に、尿意に似た何かがぞわぞわとせり上がっ

てくる♡まさか粗相してしまうんだろうか。そんな恥ずかしい姿、いくらなんでも見せられない。

「ル、キウス」

クリトリスをかわいがるルキウスの手に、自分のそれを重ねる。

「ん、なんだ？手をつなぎたいのか？そんなかわいいことをされたらますます止まれないな♡」

「ち、ちがあっ♡」

ルキウスがこりゅこりゅの肉芽を押しつぶしながら激しく揺さぶってくる。かえって逆効果だったことに後悔しながら、腰が勝手に突き出してしまう♡きゅうっ♡とおマンコが勝手に締まって、ガクガク腰が震えて気持ちいいのがパチパチ弾けた♡

「お♡いぐっ♡いっっちゃう♡♡」

「はは、もう限界みたいだな♡よくがんばったな♡ほら、かわいいイキ顔みせてごらん♡」

とどめとばかりに敏感な襷を押し込まれて、きゅゅっつと肉芽を押しつぶされた瞬間、ぷしっ♡ぷしゅあああっ♡♡と透明な液体が勢いよく飛び散る。

「おや♡」

「や♡ああ♡と、とまんじゃっ♡」

透明な液体がびゅくびゅくっ♡と噴き出して、白旗あげてるみたい♡貞淑とは程遠い、淫乱おマンコです♡って自分でアピールしちゃっている♡

「あえ♡ああ♡はっ♡ああ♡なにこれっ♡」

「上手に潮吹きできたな♡よくできたな♡」

いったばかりの痙攣マンコをご褒美とばかりにかき混ぜてから、ちゅぽんっ♡と指を抜く♡指が引き抜かれただけでもぶるっ♡と腰が震えて、失った質量に切なく

おマンコが震えた♡

「ああ♡ああ♡」

「はは、引き抜いたのにマンコのクチが開いたままもどらないじゃないか♡もつと咥えこみたいのか？ほしがりなメス穴だな♡テラテラの穴が蠢いているのがはつきりと見えるぞ」

ルキウスがバスローブをくつろげれば、隆起した肉棒があらわになる。お腹に付きそうなほどにそそり立って、ダラダラと我慢汁を垂らした肉竿♡カリが大きく張り出して血管が浮き出っていて、はやく種付けしたい♡って訴えているようにみえる。美しい女の人みたいに整った顔をしたルキウスに、こんなものが生えているなんて。「すごい♡そそり立ってる……」

不躰だとわかってゐるのに、視線がそらせない♡ずくんっ♡とお腹の一番奥が熱くなる♡初めて知る、子宮が疼く感覚だ♡

「そんな顔で見られてはたまらないな♡」

熱っぽい声で囁かれて、ちゅくっ♡と肉槍の穂先がクリトリスをつんっ♡突く♡

「や、あ♡ルキウスっ♡」

敏感な神経が集まっている肉芽の裏側に先走りを塗りたくられて、秘裂が切なげに口をパクパクとさせる♡そこも気持ちいいけれど、もっと奥が切ない♡

「は♡あまり意地悪するのはやめておこうか♡」

膝裏を抱えられ、逞しい肉竿がびたり♡とおマンコにあてがわれる。くちくち♡とお互いの粘膜が絡み合う音が響いて、ちゅぼちゅぼ♡とまるでキスするみたいにチンポへ媚びる♡

「まったく、アリアの下のクチは我慢がきかないみたいだな♡」

ゆっくりと腰をすすめて、誰も受け入れたことのないミチミチの柔肉が押し広げられる。ふっといかりにぞりぞり♡と肉壁を削がれて、おマンコがうねる♡

「んおっ♡あぁ〜♡♡♡」

「すごいな、アリアのナカ♡こんなにもキツイのに処女マンコとは思えないくらいにトロトロだ♡そんなにオレの子種がほしかったのか♡愛いやつめ♡おまえのマンコに全部おさめてやろうな♡」

熱い肉竿が肉壁を削ぎながら奥まで入ってくる♡一気に奥まで挿入されて、どちゅんっ♡と穿たれた♡

「あがっ♡や、あぁ♡」

「オレのをすべて啜えこめたな♡えらいえらい♡」

信じられない気持ちでお互いが繋がっている場所を見れば、パンパンに張り詰めた睾丸がわたしのお尻にぴったりとくっつくほど奥までハメられている♡

「んおっ♡や、やぁ♡奥あたってる♡んあぁ♡」

「ちゃんと子宮下げておねだりできてるな♡アリアの孕み部屋までたっぷりつい

てやる♡」

腰を揺さぶられば、きゅんきゅんと疼く子宮が下がっていく♡最奥の入り口がちゅぽんっ♡と亀頭に吸い付いた瞬間、ずろろっ♡とチンポを引き抜かれる。

「あ、にやんでえ♡」

一番奥を突きあげられたのに、なんで抜かれちゃうの♡と見上げれば、ギラギラとしたルキウスの瞳と目が合った。

「かわいい顔♡奥までぶち抜いてほしいのか？」

「ほしっ♡ルキウスに気持ちよくして子宮ずんずん♡ってして♡ぐずぐずに
してほしいのお♡」

王妃としてのお役目セックスなんかじゃない♡グズグズに愛されてトロトロに
なりたい♡我慢できずにおマンコの入りに引っかけかかっている雁首の窪みを撫でる
♡イキたい♡イキたい♡お腹のナカまで熱くされて征服されたい♡

「そんな物欲しげな顔をして♡オレのチンポがそんなに好きになってしまったか？」

みっちりとマン肉を埋められながら奥まで挿入されるだけで、ビクビクと腰が跳ねる。逃げられないように抑えつけられながら腰をすめられて、媚肉が媚びるようにうごめいてしまう♡ばちゅんっ♡と子宮を押し上げられて、舌を突き出してしまふ♡

「いぎっ♡おっ♡あっ♡ん、んんんっ♡」

唇を塞がれて、舌が絡み合う♡そのまま腰を穿たれて、子宮が押しつぶされる♡一突きされるたびに、身体がガクガクと震え、脳天が痺れていく♡ずくんっ♡と子宮が締まって、チンポを締め上げていく♡カラダが勝手に搾精の準備をはじめて、ちゅぽ♡ちゅぽっ♡としゃぶる♡甘く痺れた脳髓からドバドバとしあわせが流れ込んできて、目の前の広い背中に思い切り縋った。それをおねだりととらえられた

のか、最奥を抉っていた亀頭がぐりゅんっぐりゅんっ♡と押し付けられる♡鈴口がビクビク♡と震え出して、亀頭がぷっくりと膨らんでいく♡種付けされるんだ、とわかってブルブル震える子宮を、ひときわ力強く突き上げられた♡頭が真っ白になると同時に、子宮が肉竿をぎゅう♡と包み込んで、プシッ♡とイキ潮吹いたのがわかった♡

「びっ?!♡おっ♡あ、あゝっ♡」

びゅく、びゅるっ♡びゅーっ♡

最奥で弾けとんだ肉棒から、熱い精子が放出される。どくどくと脈打つ肉棒の体積が萎むのと反比例するように、お腹が重くなる♡こんな長い射精されたら、子宮が溺れちゃう♡

「あ♡あはっ♡しゅこい♡ナカあつい♡♡やけどしゅるっ♡ずっとときもちいいの♡とまらない♡♡♡」

子宮がじいんと深く痺れて、ずっと腰が震えてる♡口の端からよだれが垂れて、枕へ染みこんだ♡

「はは、すごい顔だ♡すこし効きすぎたか？」

——ききすぎた？なんのことだろう？

焦点のあわない瞳でルキウスを見つめていると余韻に震えていた子宮のナカでまた質量が増していく。さつき萎えたはずの雄がまたミチミチと子宮を圧迫しはじめる。

「ひっ♡?!なんでっ?!」

「すまないな、オレも王としてではなくただの雄として、アリアのことがもっとほしくなった♡さあ、もっと愛し合おうじゃないか♡」

ルキウスは微笑みながら、ゆっくりと腰をグラインドさせる。どっちゅんっ♡と挟まれて、目の前が真っ白になる。おかしくなりそうなくらい気持ちよくされてい

るのに、勝手におマンコがまた締まっていく♡もう後戻りできない身体にされちゃうことを自覚しながら、わたしはルキウスに縋りつくしかなかった♡

ロマナ王国に嫁いできて半年あまりの月日が流れた。夫であるルキウスも結婚してから態度を一切変えることなく、わたしを愛してくれる。見目麗しい他の令嬢たちにも目移りせず、よき君主、夫としてわたしに接する。政治にかかわるなど狭量な態度をとることもなく、むしろ積極的に意見するわたしを歓迎してくれている。すべては順調で、満ち足りた生活だった。

大臣に福祉の政策を相談し自室へ戻る途中、ルキウスを見かけた。声を掛けようとしたが、まるで人目を忍ぶように果樹園の奥へと入っていく。彼の後ろ姿が気になり後を追った。

なにやら熱心に使用人の女と話し込んでいる。ただ、女は立ち姿が妙に堂々としていて違和感があった。肌も白く、ただの下働きにしては手入れが整っているように見える。

「……やっとここに戻ってこれたのだな」

「ええ陛下。首尾よくすべて終わりました。けれども、別れるときに追いつがられて骨が折れましたよ」

女の鈴を転がすような声には聞き覚えがあった。忘れるはずもない、あの日王宮で元婚約者に腕を絡めていた女の声だ。

——いったいどういうこと？別れるのに骨が折れた？あの女がどうして王宮にいてルキウスと話しているの？

「はは、それだけお前のお香に惑ったのだろう。王になろうという者が、女に溺れて意のままになるとは情けない。ただ、そのおかげでオレはアリアを我が妻とできたのだからその浅はかさに感謝した方がよいのだろうか」

——わたしの婚約破棄は、ルキウスの謀略だったの？あの時優しい言葉をかけてくれたのも、助けてくれたのも、全部嘘だったの？

わたしはあまりのことに言葉を失い、後ずさる。靴裏に固い感触を感じて、その

まま踏み抜くとパキッと乾いた音がした。